運動部のモラールの研究
―高等学校におけるラグビー部について―

菅　田　圭　次
西　山　常　夫

I. は じ め に

運動部は，スポーツ活動を目的とした個人の集まりであり，そのスポーツ活動のために存在する比較的永続的で活動的な集団である。

一方，運動部のモラール（morale）は。部員が，部の目標に積極的な意義を感じ，強く結束して，目標達成のために協力する集団機能ということができる。

モラールの概念は一定ではなく，それが個人的なレベルの概念であるか，あるいは，集団的な概念であるかといった，概念構成のレベルに対しても確答が与えられていない[1]。たとえば従来，産業心理学がグループ・ダイナミックスの立場からの研究が多数あるが，必ずしも研究者間の意見は一致しているようには思われない。心理学事典[2]では，個人的概念と集団概念をあげ，集団的概念として用いた場合「明確に設定された集団目標があり，集団成員が，その目標に積極的意義を感じ，その達成の可能性を信じて，集団活動が協力的，効果的に進められるような（集団の）状態あるいは特徴」であると定義している。また正戸[3]は，「人間集団の融合的な結合感情を基礎として，ある目的に満進する意欲的積極的な行動遂行を特徴としており，それは，①集団概念であること。②集団の各成員にじゅうぶんに共通した目的が存在すること。③その共通した目的を各成員が容認し，その集団目的を遂行し追求するために，個々人の目的をその共通目的に従属せしめる成員の共通意欲および決心が存在すること。④その共通意欲が持久的で，首尾一貫していること。⑤モラールとは直接的にはこのような条件をもつ個人またはグループの spirit or mood である」と定義づけている。また正田[4]は，「個人の特性を強調する立場と集団の特性を強調する立場があるが，どちらかが正しいというわけにはいかない。なぜなら，モラールとはこの両者が輻輳しあう集団的測度として考えられるところにその特色があると思われるからである」と述べ，両者の輻輳に特色を認めている。

このように個人，集団，両者の輻輳のそれぞれを強調する立場があるが，本

研究では，集団的概念を強調する立場をとり，運動部を構成する部員が，部の規則を守り，その目標達成のために，集団の活動を高めるような集団的機能の特性とした。

このように運動部のモラールを規定した場合，運動部におけるモラールの状態から，部員個々人の活動意欲や協力精神を知り，同時に運動部全体の雰囲気を知ることは勿論，運動部のモラールを高めたり，あるいは低めたりしている各要因の実態をみいだし，評価することによって，運動部の機能の検討を行なうことが可能となる。このようなフィードバックの過程の検討を通じることにより運動部の運営がよりスムーズに行なわれるようになるであろうし，課外活動を教育の１分野としてとらえ，その目標である「人間形成」という課題を論ずる上にも，モラール調査が果たす役割は大きいと考える。

そこで本研究は，東京都内における高等学校のラグビー部を対象にモラール調査を行ない，競技成績の上位校と下位校とを比較見当しながら，その実態を探ろうとするものである。

Ⅱ．方　法

1）調査対象

調査の対象は，東京都内における271名でありその内訳は表１の通り高等学校10校のラグビー部員の１・

表１　調査対象

	１年生	２年生	合　計
上位３校	63	60	123
下位７校	106	42	148

表２　各研究者のモラール規定要因

研　究　者	要　　因
尾　高　邦　雄	仕事への満足、仕事の意義の自覚、集団への帰属意識，集団の団結力
石　毛　長　雄	仕事の選択，一体感，仕事の継続，経営管理の条件，仕事に対する誇り
日本労務研究会（態度調査委員会）	職務と作業条件，人間関係，経済的報償，能率管理，個人的満足
Katz. D	職務満足，会社との一体感，作業グループについての誇り，給与や昇進の機会についての満足
Blum, L.M	目標に向っての目に見える進歩，グループへの連帯感情，目標に到達するに必要な仕事への個々人の参加，進団への一致
Leighton. A.H	進団目的に対する信頼感，指導者に対する信頼感，組織の能率性，集団成員に対する信頼感，集団成員個々人の精神的・内体的健康

2年生である。

なお上位校とは，昭和57年度全国高等学校総合体育大会東京都予選で，準決勝まで勝ち進んだ内の3校であり，また下位校とは同大会において準々決勝以前に負退した内の7校である。

2） 手　続

① 上記の対象について，1983年1月から2月に，竹村，丹羽の作成[5]した20項目にわたる質問紙により実施した。

② モラールを規定する要因について，内外のモラール研究から，その主なものを概観[6)7)8)]してみると表2のようになる。

このように，モラールを規定する要因は，研究者の視点によって異なるし，また，各研究者の使用するモラールの定義によ，て必ずしも一定ではない。したがって，運動部を対象としたモラール調査では，運動部特有のものが用いられて当然であろう。

そこで。本研究では表3[9]のモラール調査の基準と項目に沿って行なった。

モラール調査の内容は表4に示す通りである。なお前述のように，モラールを集団的な概念でとらえようとしたが，操作的には集団のレベルの質問に加えて個人的レベルの質問を通さなければならない，いくつかの質問がふくまれている。

表3　モラール調査の基準と項目

基　準	項　目	問　い
部員と部との関係	役割意識	1～3
部内の人間関係	部内の協力，部内の調和，上級生と下級生の関係，キャプテン・マネージャーと部員との関係，監督・コーチと部員の関係	4～9
部の集団機能	運営に対する信頼，部の管理運営，指導者の指導能力，部の練習能率，意志の疎通	10～14
個人的満足感	承認の満足感，運動部との一体感，個人的要求の満足感，運動部と個人との目標の一致度，試合に出る機会	15～20

Ⅲ．結果および考察

1） モラール得点の算出

各人のモラール総得点を求めるために，それぞれの質問について，各人の反

表4 モラール調査の内容

これからの問いは，答えが5・4・3・2・1の5段階に分かれています．言葉による説明は，程度を判断するのに便利なように，3ヵ所だけ大体の基準を示したものです．それぞれの質問は，各部員によって違うために判断のしにくいものもあると思いますが，あなたの所属している運動部全体をながめて5・4・3・2・1の中から自分の考えに最も近い程度を一つ選んでその番号に○印をして下さい．

モラール (morale) または志気という言葉の意味は，一般に「明らかな集団目標があり，集団成員がその目標に積極的な意義を感じて，集団活動が協力的で効果的に進められるような集団の状態である」と考えられています。

1	部員によって違うと思いますが，部全体としてみた場合，部の目標達成のために部員がどの程度に頑張っているとあなたは考えますか．	5 非常に頑張っている	4	3 普通程度	2 1 全く頑張っていない
2	あなた自身は，部の目標達成のためにどの程度に頑張っていますか．	5 非常に頑張っている	4	3 普通程度	2 1 全く頑張っていない
3	あなたは，部の目標達成のために，どの程度，協力していますか．	5 非常に協力している	4	3 普通程度	2 1 全く協力していない
4	あなたは，部内の上級生と下級生の気持が，どの程度にあっていると思いますか．	5 ぴったり一致している	4	3 普通程度	2 1 全くあっていない
5	あなたは，キャプテン・マネージャと部員の気持が，どの程度にあっていると思いますか．	5 ぴったり一致している	4	3 普通程度	2 1 全くあっていない
6	あなたは，部長・監督・コーチと部員の気持が，どの程度にあっていると思いますか．	5 ぴったり一致している	4	3 普通程度	2 1 全くあっていない
7	あなたは，部全体としてながめたとき，部員同志がどの程度に親しいと思いますか．	5 非常に親しい	4	3 普通程度	2 1 全く親しくない
8	あなたは，部員が全体として，どの程度まとまっていると思いますか．	5 非常にまとまっている	4 いくつかのグループにわかれているが，普通程度にまとまっている	3	2 1 全くまとまっていない
9	あなたは現在の部の運営のしかたを，部員がどの程度支持していると思いますか．	5 全面的に支持している	4 普通程度	3 意見がわかれている	2 1 全く支持していない
10	あなたは部員の不平不満が，どの程度，うまく取り上げられていると思いますか．	5 非常にうまく取り上げられている	4	3 普通程度	2 1 うまく取り上げられていない
11	あなたは，部生活や練習で各部員の取り扱いが，どの程度公平におこなわれていると思いますか．	5 非常に公平である	4	3 普通程度	2 1 不公平である
12	あなたは，部における技術の指導が，どの程度うまくなされていると思いますか．	5 非常にうまくなされている	4	3 普通程度	2 1 うまくなされていない
13	あなたは，部の練習が，どの程度能率的におこなわれていると思いますか．	5 非常に能率的である	4	3 普通程度	2 1 全く能率的でない
14	あなたは，部内でお互の意見を，どの程度に出し合っていると思いますか．	5 非常によく出し合っている	4	3 普通程度	2 1 全く出し合っていない
15	あなたは，部におけるあなたの認められかたについて，どの程度満足していますか．	5 非常に満足	4	3 普通程度	2 1 非常に不満
16	あなたの部が，部の目標に近づくことを，どの程度に嬉しいと思いますか．	5 非常に嬉しい	4	3 普通程度	2 1 全く嬉しくない
17	あなたは，現在の部に所属していることを，どの程度誇りに思っていますか．	5 誇りに思う	4 少し程度に感じる	3 別に何も感じない	2 1 少しはずかしいかはずかしく思う
18	部の目標とあなたの個人的な目標（要求）が，どの程度に一致していますか．	5 全く一致している	4	3 やや一致している	2 1 全く違う
19	部生活にたいするあなたの要求は，どの程度満足していますか．	5 非常に満足	4	3 普通程度	2 1 非常に不満
20	あなたが試合に出る可能性は，現在または将来どの程度あると思いますか．	5 非常に多い	4	3 普通程度	2 1 全くない

応カテゴリーを点数に換算し，個人別に総得点を算出した。ここでは換算点の算出方法として，シグマ値法を用いた。その結果，各個人ごとの各項目への反応が点数に換算され，それを合計した総得点をその人のモラール得点とし，各項目ごとに上位校と下位校とのそれぞれに換算点の平均値を算出し，平均値の差の検定を行なった（表5）。

2） 項目分析

① 部員と部の関係については，すべての問いで上位校と下位校との間に有意差が認められた。このことから上位校は下位校に比べ部の目標のために自他共に協力し合い頑張り合っている様子がうかがえる。

② 部内の人間関係についても，上位校と下位校との間に，すべての問いで有意差が認められた。このことから上位校は下位校に比べ，部長・監督・コーチ等と部員との間に気持ちの一致がみられ，また，キャプテン・マネージャーと部員，あるいは上級生と下級生といった部員同志の親和が感じられる。そして，部の運営の仕方についても部員の支持が得られているものと思われる。

③ 部の集団機能についての項目については，部における技術の指導と練習の能率に関して上位校の有意が認められたが，他の3つの問いについては有意差が認められなかった。このことから上位校は下位校に比べ，部における技術

表5 上位校と下位校の各項目別平均値と分散および有意差検定

	上位校 $\bar{X}$	上位校 S^2	下位校 $\bar{X}$	下位校 S^2	検定
1	32.20	51.03	20.87	82.43	***
2	33.57	50.08	21.31	87.94	***
3	32.83	51.14	20.54	93.26	***
4	24.35	62.32	15.28	59.75	***
5	34.68	48.74	17.34	64.74	***
6	27.88	57.25	13.15	78.61	***
7	33.66	40.83	19.49	66.45	***
8	33.93	40.62	18.53	73.18	***
9	32.44	45.51	16.82	61.21	***
10	22.79	64.57	22.93	79.25	
11	19.33	60.39	21.82	80.93	
12	28.02	58.65	14.34	76.35	***
13	29.45	59.38	15.65	75.59	***
14	21.34	66.07	23.46	79.78	
15	21.82	58.94	23.77	64.35	
16	27.78	42.32	20.54	79.87	***
17	30.96	36.92	22.17	76.13	***
18	28.35	54.84	18.36	91.14	***
19	22.75	57.88	23.62	63.94	
20	18.91	60.67	19.95	76.28	

信頼水準は
***…1%を示す。

の指導が良く行なわれ，また，練習も能率的になされているものと思われる。しかし，部員の不平や苦情の取り上げられ方や部生活や練習での各部員の取り扱いの公平さ，あるいは，部内でのお互えいの意見交換といったような，部の集団機能としての運営に対する信頼や意志の疎通に欠けている様な点がみうけられる。

④ 個人的な満足感については，上位校は下位校に比べ，部の目標とに一致が認められ，現在の部に所属していることを誇りとし，家が目標に近づくことを嬉しく思っている様子がうかがわれる。しかし，部における個人の要求の満たされ方に不満が残されている様に思われる。

Ⅳ. ま と め

本モラール調査は，東京都内における高等学校のラグビー部を対象に，運動部員が部の規則を守り，その目標達成のために集団の活動を高めるような集団機能を特性とした集団的概念を強調した立場をとり調査した。

その結果，上位校は下位校に比べ，部員が部の目標に積極的な意義を感じて，部活動が協力的で効果的に進められている様子がうかがわれたが，部内における個人の認められ方に不満が残されていることに代表されるように，個人の不平や苦情，個人の取り扱いの公平さ，個人的な要求に満たされない様子が感じられた。

参 考 文 献

1） 心理学実験指導研究会編：モラール調査「実験テスト」，151項（1961）

2） 梅津他編：心理学事典，平凡社，242頁（1959）

3） 正戸茂：労働意欲とモラール「心理学講座」中山書店，23—24頁（1953）

4） 正田亘：モラールをめぐる諸問題「産業集団心理学」朝倉書店，280頁（1966）

5） 竹村昭，丹羽劭昭‥運動部のモラールの研究(1)，体育学研究12巻2号，（1967）

6） 正田亘：前掲書，272頁

7） 兼子宙：経営心理学入門，ダイヤモンド社，202—203頁（1963）

8） 尾高邦雄：現代の社会学，岩波書店，303—306頁（1958）

9） 竹村昭，丹羽劭昭・前掲書